



公益社団法人

日本語教育学会

2018 年度支部活動【北陸支部】開催報告

主催：公益社団法人日本語教育学会

後援：福井大学語学センター

開催日：2018 年 9 月 1 日（土） 14:00～16:00

会場：F-SQUARE706・707 会議室

参加者：40 名（会員 14 名・一般 26 名）

2018 年度北陸支部活動が、9 月 1 日（土）に福井市駅前 F-SQUARE で開催されました。今年度は委員企画によるシンポジウム「地域の日本語教育を支える継続可能な仕組みとは？－福井県内の小学校の事例から－」を開催しました。地域在住の外国にルーツを持つ子供たちの支援に関心を持つ福井県内の方を中心に、40 名の参加者がありました。

シンポジウムではまず 3 名の報告者が自身の取組について報告を行いました。半原芳子氏（福井大学連合教職大学院）による「外国にルーツを持つ子供への『教科・母語・日本語総合育成学習』の取組」、辻端聡子氏（公益社団法人ふくい市民国際交流協会）による「外国にルーツを持つ子どものサポート－公益社団法人ふくい市民国際交流協会の取組」、桑原陽子（福井大学語学センター）による「福井大学の取組」です。

これらの報告をもとに、参加者が 5 人のグループに分かれて、子どもの支援を安定的に継続させていくためにはどうすればよいか、現在の自分の取組をどう発展させることができるのかについて、意見交換を行いました。その後の全体セッションで、意見の共有を行いました。

このシンポジウムでは、ファシリテーターとして、福井大学連合教職大学院の隼瀬悠里氏をお迎えしました。隼瀬氏は教師教育学、比較教育学がご専門です。あえて日本語教育とは接点のない方にファシリテーターをお願いし、現状を読み解いていただくことがこのシンポジウムの大きな目的の 1 つでもありました。



最初に 3 名が各自の取組について報告した

40 名という参加者数は予想を上回るもので、グループセッション、全体セッションともに当初の目的が達成されたと感じています。ネットワークの大切さや実践の共有の必要が確認されたシンポジウムであり、次につながる十分な手ごたえを感じた支部活動でした。

（報告者：支部活動委員 桑原陽子）

グループでの意見交換